

# 教員養成における幼稚園5領域科目の内容構成（4）

－「言葉」に関わる教育内容研究知見に依拠して－

棚橋尚子

（奈良教育大学 国語教育講座（国語科教育））

宮下俊也

（奈良教育大学 教職開発講座（教職大学院））

横山真貴子

（奈良教育大学 学校教育講座（保育内容））

## The Construction of Content in 5 Area in the Course of Study for Kindergarten at Teacher Training Course（4）

－Based on the Study for “Language” “Expression”－

Naoko TANAHASHI

(Department of Japanese Language Education, Nara University of Education)

Toshiya MIYASHITA

(Professional Development in Education, Nara University of Education)

Makiko YOKOYAMA

(Department of School Education, Nara University of Education)

**要旨：**本報告は、平成 31 年度に改訂する奈良教育大学教育課程において新たに設置する「領域及び保育内容の指導法に関する科目」としての「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」（いずれも現時点での仮称）の内容構成を提示するものである。その 4 となる本稿は、平成 29 年告示の新幼稚園教育要領における「言葉」領域のねらい及び内容に即し、気持ちを言葉で表現すること、作文学習、言葉で伝え合うことに関わる専門的研究知見を報告し、それを背景とする新科目のシラバス構成に寄与させることを目的とする。

**キーワード：**幼稚園教育要領 Course of Study for Kindergarten  
領域「言葉」 ”Language”

### 1. はじめに

本稿は、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下、中教審答申）、及び新幼稚園教育要領（以下、新教育要領）に即し、奈良教育大学における幼稚園の領域に関する科目で扱う内容を定め、5 領域ごとに示すことを目的とする。

また、ここで定める内容は、教育職員免許法の改正に伴って新設する「領域及び保育内容の指導法に関する科目」としての「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」（いずれも現時点での仮称）の「領域に関する専門的事項」として反映させ、平成 31 年度からの新教育課程に位置付ける。そのことにより、現行の小学校教科専門科目との共通履修を認めてきた幼稚園教科科目<sup>1)</sup>、さらには保育内容の指導法に関する科目<sup>2)</sup>との区別を明確にし、幼稚園教諭としての資質・能力育成の強化を目指す。

本稿で示す教育内容は、①中教審答申に示された「幼

児教育において育みたい資質・能力」、②担当予定教員がこれまでの研究や教育実践において築き得た知見、③新教育要領における各領域の「ねらい」及び「内容」、の 3 点を接合させて明示するものである。幼稚園教諭を目指す学生にとっては、この内容を学ぶことにより、各領域に関わる学問的・専門的な裏付けをもとに、幼児に育む「何を感じたり、何に気付いたり、何が分かたり、何ができるようになるのか」<sup>3)</sup>といった特に「知識・技能の基礎」を理解できるものと期待される。

（宮下俊也）

### 2. 各領域の内容

#### 2. 1. 「言葉」の内容

##### 2. 1. 1. ねらい「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」について

自分の気持ちを言葉で表現することの楽しさは、幼児がこの先初等中等教育を学び続けていくための基盤であ

り、学びにおける対話活動を促進するための土台である。それは、学びに向かう力、人間性の向上を保障し、思考力・判断力・表現力といった能力の育成に寄与するものである。しかしながら、これまで日本の子どもたちは家庭や社会において自己表現をすることの良さを味合わないで育ってきていると言っても過言ではない。このことは欧米との言語育成意識の差から読み取ることができる。

山本麻子は著作の中で、日本人と英米人の母親の子どもに対する言語育成意識を比較した調査について言及している。以下、引用する。

英米人の母親は、どちらかという、一つの出来事について、話の詳細を尋ねたり、細かい描写を求めたり、できるだけたくさん話させたりするという傾向がでています。また、自分の子供が話すのを聞いて、その話の内容や話し方についての評価を明確に示すようです。それに対して、日本人の母親は、子供の話に対して評価をすることは少なく、どちらかという、子供の話の確認や承認を頻繁にし、子供の話から何が起こったかを一生懸命推測してやろうとする姿勢が強いようです。そのためか、子供の話の量が少なくなるということもあるようです<sup>4)</sup>。

引用によると、日本人の母親は子どもに対し、「よい聞き手＝子どもの庇護者」になろうと努めているようである。この傾向は家庭だけにあるのではなく、かつては学校現場でも似たような状況があった。授業で最も活躍するのはほかならぬ教師であり、子どもが言いよんだり、発言に対し不安げな様子を示したりすると、教師の方が言葉を重ね何とか子どもたちに学習内容を理解させようとするということが常態化していた。国語科の授業で段落の要約などを子どもにさせた場合、子どもたちに発表はさせても、結局は教師の「模範解答」が黒板上に示され、子どもの発言はなかったかのごとく処理されていく。このような活動が重なれば、子どもたちは学びに対して受け身になり、発言したことの達成感などは霧散していくのである。

PISA の読解力調査では、改善されてはいるものの、日本の15歳生徒たちの「解釈」「熟考・評価」の結果が振るわない。さらに記述式問題の無解答者もまだまだ目立つ状況にある。欧米の生徒達がそれらの問題に対し「とにかく書けることは書く」というスタンスで臨むのとは対照的である。

欧米との比較でさらに特記できるのが日本人の子どもたちに起こりやすい「スピーチ不安」の問題である。神部秀一、井上健治は「聴衆の面前で話をするときを感じる不安」は欧米人生徒より日本人生徒で起こりやすいことを解明した<sup>5)</sup>。それは、日本人生徒に話すことでの成功経験が少ないことに起因する。すらすらと話すこと、形式が整うことが求められることなど、日本でのスピー

チ学習は「楽しさ」とは遠いところで息を凝らして存在しているのである。

目を転じて初等中等国語科における「読むこと」の問題を考えると、かねてより指摘されてきた「文学偏重」の傾向は止まることを知らない。そして、長時間かけて一つの教材を読解するときの照準は「登場人物の気持ち」である。文学において表象化している現実とは作品世界の一部であり、叙述の裏には読者が読み深めていくべき多くの事柄が沈んでいる。その中核が登場人物の気持ち、心情、心理だと考えるとき、それについて想像を巡らせる活動をすることは至極妥当だと言える。しかし、それだけ力を入れて学んでいるにもかかわらず、生活の中で児童生徒が他人の気持ちを押し量れないという事実は、いじめをはじめとした様々な問題から垣間見ることができる。

このことは自分の気持ちを意識しないまま、つまり自身の気持ち、ひいてはそもそも「気持ち」そのことについて正面から対峙しないまま、学習として文学作品における登場人物の気持ちを推測している点に原因があると言える。次期学習指導要領で明示された「日常生活とのつながり」という視点が置き去りにされてきたのである。

そもそも日本の言語文化が、自分の気持ちの発言を重視しないことも問題であり、上述したさまざまな課題の根底にあると思われる。

さて、先にも述べたように「自分の気持ちを言葉で表現することの楽しさを味わう」ことは、これからの学習の礎である。また、学習のみでなく、子どもたちがよりよい生活を送るためにも必要不可欠な行為である。日本的な言語文化に埋没していると、現状に違和感や不自然さを感じにくい、これからの世界を生きていくために必要なコミュニケーション力の育成という視点から真剣に考えなくてはならない課題である。

上記の点を踏まえ「自分の気持ちを言葉で表現することの楽しさ」を感得させていくことを考えたときに、まず考えるべきことは受容的な聞き手の存在が不可欠だということである。

作文学習の視点からこのことについて考える。小学校入門期には口頭作文を活用することがある。子どもたちはまず、話すことを文字化していく。茂呂雄二は子どもが文を書けるようになるためには受容的な聞き手が必要だと指摘する<sup>6)</sup>。子どもが書いたことに対し「すごいね。そのあとどうしたの。」などと聞いてくれる受容的な読み手を自己内に取り込んでいくことで子どもたちは書くことを可能にしていくのである。これは音声言語でも同様であり、自分の発話を興味深く聞いてくれたり、肯定してくれたりする環境では子どもは積極的に表現できる。したがって、指導者は「よい聞き手＝育成者」となる必要がある。英米人の母親のように「話の詳細を尋ねたり、細かい描写を求めたり、できるだけたくさん話させたりする」ことを心がけることが大切である。それが幼稚園

教育要領における内容「(1)先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」ことにつながっていくのである。

(棚橋尚子)

## 2. 1. 2. ねらい「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう」について

子どもは、どのように人と「言葉で伝え合う」ことの喜びを感じるようになるのであろうか。横山(印刷中c)は、その発達過程を、乳児期から描き出し、その基盤には、特定の人との間の情緒的な絆、すなわち愛着関係があることを示している。信頼する人に、ありのままの自分を受け止められ、認められる経験を重ねることで、「身近な人と気持ちが通じ合う」(保育所保育指針,2017)心地よさを感じるようになる。この心地よさが、人と思いを分かち合いたい、人に自分の気持ちを伝えたい、相手の思いを知りたい、といった「伝え合い」の育ちの基盤となるのである。

横山(2016、印刷中b,印刷中c)では、こうした乳児期からの育ちを基盤に、子どもの言葉は「①話す→②聞く→③伝え合う」という3つの過程を経て、発達していくことを示している。

まず①「話す」ことの基盤には、「伝えたい人」がいて、「伝えたいこと」があることが必要である。内容(1)「先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」にも関わるが、子どもは、信頼する人との関係の中でこそ安心して自分の気持ちや思いを言葉で表現できるようになる。内容(3)にあるように「したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。」ようにもなり、内容(6)「親しみをもって日常の挨拶をする。」ようにもなる。

また、内容(2)「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」にも関わるが、心が動く経験があつてこそ、子どもはその経験を言葉で表現しようとする。伝えたい経験なくしては、言葉は生まれない。

しかし、言葉の獲得途上にある子どもにとって、伝えたい思いや経験を言葉だけで表現することは容易ではない。保育者の援助が不可欠である。そのため、保育者には、一人ひとりの子どもの言葉に丁寧に耳を傾け、子どもの思いを読み取りながら、その思いを代弁・表現する援助が求められる。そうした援助を受けながら、子どもは、内容(8)にあるように「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。」のである。

次に②「聞く」ことについて、自分の言葉をしっかりと受け止め、十分に聞いてもらう経験を積み重ねた子どもは、人の言葉にも耳を傾けるようになる。そして内容(4)にあるように「人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。」ようになる。こうした姿が③「伝え合い」

に育つのである。横山(2017)では、5歳児1年間の横断的な観察から、クラス集団での「言葉による伝え合い」に着目し、活動の形態と機能、保育者の援助について分析しているが、クラスみんなで共有することを目的とした活動が最も多く、クラスのつながりや一体感を育むことが重視されていた。「協同性」の基盤形成において、言葉による「伝え合い」が重要な役割を担っていることを示唆している。

## 2. 1. 3. ねらい「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」について

絵本は、子どもの言語発達を促すことが従来の研究から明らかにされている(例えば、Fletcher,K.L. & Resse,E., 2005)。保育においても言葉を育てる重要な教材の1つである。横山(横山,2007ほか)は一連の研究において、保育現場における絵本の役割について検討している。横山(印刷中a)では、保育における絵本の役割を、子どもと絵本との出会いの観点からまとめている。絵本との出会いを「つくる」「広げる」「つなぐ」「深める」の4点を役割として挙げ、それぞれを以下のように説明している。まず、家庭で絵本と接する機会の少ない子どもにとって、絵本と出会う場を「つくる」。次に、家庭では読むことの少ない多様な種類の絵本との出会いを「広げる」。そして絵本を介して子どもと保育者、子ども同士、家庭(保護者)と園、さらには子どもと遊び、子どもの生活と物語世界などを「つなぐ」。最後に保育者の絵本の読み方によって、子どもの言葉の力の育ちが異なる(Dickinson & Smith,1994など)など、絵本との出会いによって子どもの育ちを促すといった「深める」である。こうした出会いを通して、子どもは内容(9)「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」といった経験を深めていくことにもなるのである。

また、絵本は、内容(7)「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。」経験にもなる。新幼稚園教育要領(2017)では、「言葉に対する感覚」を豊かにすることが強調され、「言葉の響きやリズム」に触れ、その楽しさを味わえるようにすることが新たに求められている(内容の取扱い(4))。横山(印刷中b)では、子どもがいかに関生活の中で「言葉の響きやリズム」に親しみ、「言葉に対する感覚」を豊かにする経験を深めているかを示しているが、そこでの絵本の役割の大きさも分かる。

このように横山の一連の研究から、領域「言葉」に関して、保育における絵本の役割について概観することができる。

(横山真貴子)

## 3. おわりに

今回の教職課程の改正は、幼稚園教員養成の自立の宣

言とも言われている。「教科に関する科目」が「領域に関する専門的事項」に変更され、小学校の教科ではなく、幼児教育の領域に沿った専門知識の習得が目指されることになったためである。この「領域に関する専門的事項」は、次のようにまとめられる（保育教諭養成課程研究会編,2017, p.12）。

「領域について、領域それぞれの学問的な背景や基盤となる考え方を学ぶことを基本とする。幼稚園教育において、「何をどのように指導するのか」という視点で見たときの「何を」を深める部分である。幼稚園教育要領に示されているねらい及び内容を含めながら、これらに限定されることなく、より幅広く、より深い内容が求められる。

それゆえ、授業担当者には、各領域に関連する専門分野を専門としながらも、「幼児」や「幼児期の教育」、「幼稚園教育」について深い理解が求められる。

本稿の各領域の専門的事項の担当者は、いずれもそれぞれの専門分野の学問的知見を、「幼児」や「幼児期の教育」の視座から捉え直し、新たに編成し、新しい学問知を生み出している。変化の激しいこれからの時代を生き抜く子どもを育成していくためには、幼稚園教諭の養成においても、「幼児」を中心に置きながら、幅広く、より深い内容の知識・技能の習得が求められる。本学授業担当者の専門性と学問的知見は、それに応えるに十分である。

今後は、これらの授業科目と「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）」とを連携させ、さらには保育士養成の授業科目とも関連させながら、本学独自の保育者養成カリキュラムの構築を目指す。具体的には、誕生から就学前までの教育を一貫して見通せる高い実践力と指導力を備え、地域の幼児教育を牽引する力量を備えた質の高い保育者養成を目指していく。

（横山真貴子）

## 注

- 1) 「国語」（書写を含む）「算数」「幼児の数・量・図形」「生活」「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽実技」「図画工作」「幼児の造形」「体育」の10科目。
- 2) 「幼児と健康」「幼児と人間関係」「幼児と環境Ⅰ」「幼児と環境Ⅱ」「幼児と言葉」「幼児の造形表現」「幼児の音楽表現」の7科目。
- 3) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」
- 4) 山本麻子（1999）『英国の国語教育—理念と実際』リーベル出版
- 5) 神部秀一・井上健治（1997）「中学生のスピーチ不安に関する研究」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 46』
- 6) 茂呂雄二著・汐見稔幸補稿（1988）『なぜ人は書くのか』東京大学出版会

## 参考文献

- Fletcher,K.L. & Resse,E. 2005 Picture book reading with young children: A conceptual framework. *Developmental Review*, 25, 64-103.
- 厚生労働省（2017）,「保育所保育指針」
- 横山真貴子（2004）, 絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究：保育における文字を媒介とした活動 風間書房
- 横山真貴子（2007）,「3歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連：入園直後の1学期間の絵本とのかかわりの分析から」, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 第15巻, pp.91-99.
- 横山真貴子（2012）,「読書教育における保・幼・小の連携：絵本でつなぐ幼児期の教育と小学校教育」,『学校図書館』, 第737号, pp.16-19.
- 横山真貴子（2016）,「幼児期に育む言葉による伝え合いの基礎」,『初等教育資料 8月号』, 東洋館出版社, pp.88-91
- 横山真貴子（印刷中 a）,「子どもの絵本との出会いと保育者の専門性」, 中坪史典（編著）『保育実践に埋め込まれた保育者の専門性』, ミネルヴァ書房
- 横山真貴子（印刷中 b）,「言葉」「言葉による伝え合い」 津金美智子（編著）『平成29年度新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園』, 東洋館出版社
- 横山真貴子（印刷中 c）,「言葉による伝え合い」, 無藤隆編著『10の姿プラス 5・実践解説書』, ひかりのくに
- 横山真貴子・上野由利子・長谷川かおり・木村公美・石田晶子・原田真智子（2009）,「5歳児の家庭における絵本体験の特徴：母親への質問紙調査から見る3年間の家庭での絵本とのかかわりの変化」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 第18巻, pp.23-32.
- 横山真貴子・上野由利子・木村公美・原田真智子（2007）,「4歳児の家庭における絵本体験の特徴：幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析」, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 第16巻, pp.49-58.
- 横山真貴子・水野千具沙（2008）,「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義：5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から」 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 第17巻, pp.41-51.
- 横山真貴子（2017）,「5歳児の協同性の育ちと保育者の援助（2）：協同性の育ちを支える「言葉による伝え合い」場面の分析」, 日本乳幼児教育学会第27回大会研究発表論文集